

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520805

研究課題名(和文)「人のつながり」からみた寺院社会の構造と機能の研究

研究課題名(英文) A study on structure and function of medieval temples from the perspective of human social ties

研究代表者

安田 次郎 (YASUDA, Tsuguo)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：60126191

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：室町時代から戦国時代の奈良興福寺の大乗院門跡を中心にして、さまざまな「人のつながり」について基礎的なデータを蓄積し、寺院社会の構造や機能をあらためて考えるための手掛かりを得た。京都や奈良の門跡や院家は、貴族、武士、それに在地の諸勢力などの出身者が僧として、あるいは寺社の職員として出会って相互に結びつく場であったこと、僧たちはイエから切り離された存在ではなくイエや家族の利害を代表して行動したこと、寺院社会は異集団の出身者が出会い、結びつき、補完し合う場として機能したことなどの見通しを得た。

研究成果の概要(英文)：We have accumulated various basic data on Daijoin-Monzeki of Kofukuji-Temple during the Muromachi and Sengoku Period from the "human social ties" viewpoint, and acquired hints for reconsideration on structure and function of medieval temples. They are, 1) Monzeki and Inge served as a kind of meeting ground for aristocrats, warriors, and provincial people who met each other as a monk or a staff member of the temple. 2) Monks were not cut off from their family, but performed for their interest. 3) Medieval temples functioned as a place for meeting, getting connection, and cooperating with people from different class.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：寺院 興福寺 室町幕府 尊尊 紙背文書 大乗院

1. 研究開始当初の背景

中世は公家、武家、寺社などのいくつかの社会、異集団が併存する、並び立つ、あるいは対立して存在する時代としてイメージされることが多い。しかし、寺院社会の構成員は、公家や武家社会から送り込まれてくることが多く、寺院社会を公家や武家社会とは別物として対立的に捉えることにはもともと無理がある。実際、多くの僧は「出家」の身でありながらイエを背負って行動しているのである。しかしだからといって寺院社会が公家や武家社会のたんなる延長だったわけでもない。やはりそこには独自の原理や論理がみられ、寺院社会の構造や機能は、あらためて問題にされる意味がある。

中世社会の法や制度は結局「人のつながり」で起動すること、「人のつながり」は公家、武家、寺家などの境界線を越えて(「越境」して)存在することなどに注意が向けられるようになっていた。たとえば、2007年、史学会は「『人のつながり』の中世」と題してシンポジウムを開催した。その目的は、「公家・武家・寺院それぞれの内部に、どんな自/他認識や、秩序体系や、上昇・改良指向があったのか、といった問題群を、各社会集団を成立せしめている「人のつながり」の原理に立ちもどって考察する」(村井章介編『「人のつながり」の中世』山川出版社、2008年、「はしがき」)ということであった。少し後に編まれた報告書では「越境する人脈」という視点が追加されたが、本研究はまさに「越境する」「人のつながり」の場として寺院を捉え直すことであった。

本研究に着手するうえでまことにタイムリーな成果として、高山京子『中世興福寺の門跡』(勉誠出版、2010年)があった。従来南都の門跡の研究は、所領荘園の支配構造、門跡の地位をめぐる争い、門跡による武士の編成などに焦点をあわせたものが多かった(たとえば、安田次郎『中世の興福寺と大和』山川出版社、2001年、など)が、高山の著書は、寺院において「人のつながり」を考えるとときにもっとも重要な問題である教学に関する初めての本格的な研究であった。

興福寺とは直接関係がなく、天台の曼殊院門跡に関するものであったが、五味文彦・菊地大樹編『中世の寺院と都市・権力』(山川出版社、2007年)も、「人のつながり」を聖教の継承や門跡の相承などの視点から丁寧に分析しており、示唆に富んでいた。

2. 研究の目的

イエを形成する坊官などを除けば、僧はふつつ妻帯しないので、子どもがいない。したがって、寺院社会を構成する人びとの多くは、外の世界から入ってくることになる。寺院の世界は、異集団出身の人びとが出会い、新しいつながりを結ぶ場といえよう。

公家、武家、さらに在地勢力の出身者らの「人のつながり」、彼らが形成したネットワークは、さまざまな局面で活用されたはずである。異集団が出会い、相互に結びつき、リスク回避などを模索する場、寺院にはそのような側面、機能があったと考えられる。そのことを南都興福寺を舞台として、とくに大乗院門跡を中心に解明する。

- (1) 多様なその「人のつながり」を具体的に復原して描き出す。
- (2) 公家および武家社会との関わりのなかでの寺院社会の機能や役割について考察する。

3. 研究の方法

- (1) 先行研究の収集と検討。興福寺関係に限らず、広く延暦寺や園城寺関係などを含めて行う。
- (2) すでに活字化され刊行されている史料集、たとえば『大乗院寺社雑事記』や『経覚私要鈔』などを調査して「人のつながり」を復原する。
- (3) 国立公文書館などの諸機関が所蔵する興福寺関係史料をマイクロ、あるいは紙焼き付けなどの形で収集し、研究する。
- (4) 京都市・山田家所蔵の福智院家文書中の袋綴じ冊子を開き、紙背文書を撮影する。研究連携者の上島享(京都府立大学。25年度から京都大学)の仲介によりに文書を借用して行う。研究代表者、分担者、連携者が全員集まって目録を作成し、文書を読解する。
- (5) 横浜市・中村家所蔵の福智院家文書の調査を行う。
- (6) お茶の水女子大学、あるいは東大史料編纂所に中間成果や問題を持ち寄り、検討会

を持つ。

(7) 得られた成果の取りまとめ、発表のための準備を行う。

4. 研究成果

(1) 研究のおもな成果

15世紀後半の大乗院門跡である尋尊とその家族の関係を詳細に解明にできた。両親や多くの兄弟姉妹との関係を具体的に追究することによって、中世貴族社会のひとつの「人のつながり」がイメージできた。尋尊や前代の経覚、つぎの政覚に関わる成果は、代表者の安田が尋尊の伝記のなかに取り入れて発表する予定。

尋尊とその師である九条家出身の経覚、二条家の出身で將軍義政の猶子として大乗院に入室した政覚との関係解明を通じて、イエを背負って寺院社会で生きた人びとのつながりのあり方、その一例を具体的に復原することができた。従来言われてきたように尋尊は経覚を疎んじていただけではないこと、押しつけられたと言って良い後継者である政覚と尋尊は良好な師弟関係を形成し、またそこには「猶子を通じて寺院社会を支配しようとした將軍の意図」などというものは実はないのではないかという見通しを得た。

中世の寺社は芸能の宝庫でもある。興福寺の最大行事である維摩会で行われた延年の輪郭を明確にし、芸能を通じた寺院内外の「人のつながり」について見通しを得ることができた。あわせて、延年から能への変化・発展についても一定の手掛かりが得られた。

室町時代に將軍護持僧として顕著な活動を見せた寺門派の花頂門跡について、その成立から終焉までを丹念にたどり、同門跡が上級貴族花山院家の家門丸がかえといってもよい存在であり、貴族の家と門跡とのつながりにおいて最も密接な事例であることを明らかにした。

勸修寺慈尊院にかかわる3種類の聖教目録の関係を明らかにした。そのなかで、戦国期における同院と中級貴族持明院家との関係にも触れた。

紀伊根来寺による同寺の開祖覚鑿に対する

大師諡号の奏請を検討し、地方に宗勢を伸ばして経済力を高めていた同寺が、山門・幕府に対する工作を前提に勅許を得ようとしたことを確かめた。

従来戦国大名は、領国内の様々な中間集団の自律的な秩序維持機能を破壊して、司法警察権の一元化をはかった(だが実態としては貫徹しなかった)と理解されてきた。だが、戦国大名の残した法を丹念に読み込めば、彼らはむしろ、中間集団の行う秩序維持を前提として、罪を認定する権限は大名に一元的に帰属するという論理で、中間集団の秩序維持機能の統合を志向していたことが明らかとなる。その点で、中世の寺院社会などで形成されたそれぞれの「人のつながり」の世界をつなぎ合わせて編成・統合してゆくための論理の一つを明らかにできた。

京都市山田家所蔵の福智院家文書、とくに今までまったく知られていなかった紙背文書(袋綴じにされた冊子を解体して「発見」)を解読して学界に提供した。

(2) 国内外における位置づけとインパクト 興福寺や大乗院の研究における位置づけとインパクト

大乗院の先代門跡である経覚と尋尊の関係、あるいは尋尊と政覚との関係などを、二者の問題としてのみとらえるのではなく、もっと広い「人のつながり」のなかで考察することにより、従来見逃されてきたさまざまな側面が浮かび上がってきた。そのことによって、今後『大乗院寺社雑事記』、『経覚私要鈔』、『政覚大僧正記』など当事者が残してくれた日記の読み方が少し変わり、個々の記述の背後に踏み込んだ解釈が可能になると期待できる。

延年研究における位置づけとインパクト
通説では延年は寺院の中下層の僧集団が、上級の僧集団や寺の執行部に対して、その力を誇示し威嚇する目的を以て行われたと考えられてきたが、この芸能に関わった人びとや「人のつながり」などを具体的に追跡した結果、そのような見方には大きな問題があることが

分かった。延年は、興福寺では中世前期における公式芸能ともいえるものであるが、その基本的な性格に関して問題を提起できたことは大きいと考える。今後の芸能史研究に一定のインパクトを与えたはずである。

門跡と貴族のイエ研究における位置づけとインパクト

従来、南都の門跡と撰閑家諸家との密接な関係については注意が向けられていたが、天台関係の護持僧などと貴族のイエの関係については、必ずしも研究は多くなかった。花頂門跡の輪郭や沿革が解明されたことにより、室町將軍周辺の「人のつながり」の解明がいつそう進展することが期待できる。勸修寺と持明院家の関係解明も、中級貴族にまで視野を広げたという点で成果であった。

畿内の戦国期権力研究における位置づけとインパクト

畿内の戦国権力は、寺院社会との濃密な接触という問題を避けて通るわけにはいかなかった。さまざまな「人のつながり」の世界、諸集団の統合と編成という問題を提起した。

紙背文書の収集と研究における位置づけとインパクト

福智院家文書中の冊子体記録類の紙背文書については、従来まったく注目されていなかった。たとえその存在に気がついた研究者がいたとしても、紙背文書の収集、解読、翻刻は簡単な仕事ではない。本研究の一環として行った紙背文書の収集、解読、翻刻、そして学界への提供は、今後の日本中世史研究に大いに寄与するものである。

(3) 今後の展望

さまざまな「人のつながり」が解明できたが、今後はそれらの成果をどうまとめて中世社会における寺院社会の役割や位置を総括的に描きあげるかが課題となる。その際、やはり重要となるのが、紙背文書の研究から導き出される「人のつながり」であろう。表の史料(公式の世界)の記述には必ずしも現れてこない関係の解明によって、よりリアルで具体的な寺院社会像の構築が期待できる。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

末柄豊、治部卿入道寿官、日本歴史776、査読あり、pp107-115、2013

前川祐一郎、三好氏「新加制式」の検断立法について、東京大学日本史学研究室紀要・別冊、査読なし、pp287-299、2013

安田次郎、破産した御師、加能史料会報23、査読なし、pp1-4、2012

末柄豊、禁裏文書にみる室町幕府と朝廷、ヒストリア230、査読あり、pp95-121、2012

末柄豊、土佐一条家祇候の中御門家の系譜をめぐって、ぶい&ぶい123、査読なし、pp1-11、2012

末柄豊、慈尊院古聖教目録二種、勸修寺論輯8、査読なし、pp5-35、2012

末柄豊、『看聞日記』、歴史と地理238、査読なし、pp29-31、2012

末柄豊、「十二絃道の御文書」のゆくえ、日本音楽史の研究8、査読あり、pp1-12、2012

末柄豊、大永五年に完成した將軍御所の所在地に関する覚書、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信54、査読なし、pp10-15、2011

末柄豊、花頂門跡再考、室町時代史研究3、査読なし、pp215-301、2011

〔図書〕(計5件)

安田次郎、興福寺創建1300年記念 国宝興福寺仏頭展、日本経済新聞社、pp205-208、2013

上島享・末柄豊・前川祐一郎・安田次郎、福智院家文書 第三、八木書店、268頁、2013

高埜利彦・安田次郎、新体系日本史15 宗教社会史、山川出版社、492頁、2012

安田次郎、中世文学と隣接諸学7 中世の芸能と文芸、竹林舎、pp36-58、2012

安田次郎、日記で読む 日本中世史、ミネルヴァ書房、pp217-231、2011

6. 研究組織

(1)研究代表者

安田 次郎 (YASUDA, Tsuguo)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科
学研究科・教授

研究者番号：60126191

(2)研究分担者

末柄 豊(SUEGARA, Yutaka)

東京大学・史料編纂所・准教授

研究者番号：70251478

前川 祐一郎(MAEGAWA, Yuichiro)

東京大学・史料編纂所・准教授

研究者番号：00292798

(3)連携研究者

上島 享(UEJIMA, Susumu)

京都大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：60285244